

2025 年度 研究会活動支援制度 成果報告書

エスノグラフィー研究会

研究会メンバー：加藤このみ（先端研）、大橋一輝（先端研）、長谷川莉帆（先端研）、松原一智（文学研）

研究会の目的：エスノグラフィーを講読・分析し、人類学・社会的な知の表現方法について検討する。エスノグラフィーに対しては、記述が恣意的であること、書く側と書かれる側間に不均衡な権力が働いていることなどに対する批判がなされてきた。しかしそれに関わらず、エスノグラフィー特有の魅力が今なお研究者や読者の関心を集め続けていることは事実である。その魅力の一つが、近代科学の客観的で中立的な記述ではとどまらざるような経験的事実をも含み込んだ「厚い記述」（ギアツ 1987）である。では、こうした記述は調査対象とのどのような関係のもとで構成されているのか。どのような点で説得的で「厚い」といえるのだろうか。本研究会では、古典から現代までのエスノグラフィーを講読・分析することで、エスノグラフィーという表現方法のあり方について検討するとともに、参加者それぞれが取り組んでいるフィールドワークや論文執筆に活かしていくことを目指す。

開催内容：「エスノグラフィーを読む」研究会では、ただ課題文献について議論するだけでなく、既存のエスノグラフィーの再編集・再構成作業を行う。それにより、様々な構造や表現がもたらす効果の異なりに自覚的になり、エスノグラフィーという表現方法が読者に伝えられることの可能性と限界を学ぶことに役立つ。今年度は、以下の文献を扱い、計8回の読書会を実施した。

Paloma Gay Blasco, Huon Wardle (2017) "How to read ethnography," Routledge

知念渉, 2018, 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー』青弓社

マリノフスキー, 1985, Argonauts of the Western Pacific (=2010, 増田義郎訳, 『西太平洋の遠洋航海者』, 講談社学術文庫.)

Evans-Pritchard, E.E., 1940, The Nuer, The Clarendon Press. (=1997, 向井元子訳, 『ヌアー族——ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』, 平凡社.)

表現方法としてのエスノグラフィーのあり方について検討するうえで、特に以下の点を論点として議論した。

- (1) 構成：章立て・情報の取舍選択・順序や強調点に関する検討
- (2) 対象設定：分析単位の設定・調査者と対象者の関係など
- (3) 表現：解像度や文体の柔らかさ・語りの直接引用/間接的な説明・比喩など
- (4) 理論：現場の記述から考察へのつなげ方・先行研究との付き合い方など

今後の展望：「エスノグラフィーをひらく」

エスノグラフィックな知を応用する方法として挙げられるのが「映像エスノグラフィー」とよばれるジャンルである。今年度は調査の都合等により映像化までは着手できなかったが、次年度以降には各々のフィールドで撮影した映像の編集・作品化を試み、文字と映像によるエスノグラフィーの類似点や相違点など両者の関係について議論を深めることを目指す。